

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520156

研究課題名(和文) 明治期における蝋管蓄音機の受容と普及の研究 音楽、声の記録と社会的背景を中心に

研究課題名(英文) Project on the Reception and Market Penetration of Wax Cylinders in Japan during the Meiji-era -focusing on social background and music and voice recordings-

研究代表者

松村 智郁子 (MATSUMURA, Chikako)

東京藝術大学・音楽学部・講師

研究者番号：60436699

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明治11年(1878)～大正元年(1912)12月の都市新聞から「錫箔蓄音機、蝋管、蝋管蓄音器、平円盤、平円盤蓄音機」の記事や広告、約30社、約1800件を調査し、蓄音機の機能的部分(再生と録音)の活用を明らかにした。

「再生機」としては、娯楽施設や劇場での「見世物」に始まり、軍事的催し、学校行事等、人々の集まる場で使用された。後に個人の語学学習、音楽の稽古、家庭の団欒等、小規模の使用にも広がる。時には人に変わり音楽の演奏、展示品の解説等活躍の場は尽きず、負傷者や病人のために蓄音機でミュージックセラピーも行った。「録音機」としては、通信、調査研究、遺言文、邦楽譜作り等、幅広く貢献した。

研究成果の概要(英文)：In my project, I researched into sound-recordings with the help of newspapers from the Meiji period, dating from 1878 through 1912. Articles and advertisements of "Tin-foil Phonograph", "Wax cylinder", "Wax-cylinder Phonograph", "Disc record", "Disc Phonograph" were found in newspapers from about 40 newspaper companies, summing up to approximately 1,800 in total. In this report, I will summarize the impact of these machines during the Meiji era: the role of advertisements, people's changing attitudes, the recording content, the prices and shops that sold this equipment: [Meiji Period: 1868-1912].

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：蝋管 蓄音機 明治期 新聞記事 新聞広告 音楽 芸能

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「明治期における音楽録音資料・蝋管(ろうかん)の保存体制と公開手法の研究」(平成18~20年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(B)一般 研究代表者:東京藝術大学大学美術館 薩摩雅登, 報告書編集:同大学音楽学部 松村智郁子)のうち、蝋管の基礎調査:明治期の新聞調査[同報告書2009, p. 87, pp. 103-121]を発展させたものである。

この研究では、明治10年(1877)から明治45年(1912)の蝋管・蓄音機に関する新聞記事と広告より33社、1,082記事を調査、全記事のタイトルと内容一覧を提示し、全貌を考察した。

2. 研究の目的

蝋管とは、明治21年(1888)にトーマス・A・エジソンにより改良・発明された世界最古の携行可能な記録再生媒体である。その録音・再生には蓄音機を用いる。日本でも、その翌年の明治22年(1889)から蝋管を使用しており、明治期においては一時代を築いた。本研究では、明治期に発行の新聞から、蝋管・蓄音機に関する記事や広告を調査し、使用した場所や内容、生産・販売状況、普及時から衰退に至る経緯等を考察することを目的とした。

また、収集した記事・広告の画像とそれらの書起しを掲載した研究報告書を作成して全貌を俯瞰すること、webサイトでの検索機能付きのデータベースを公開することも目的とした。

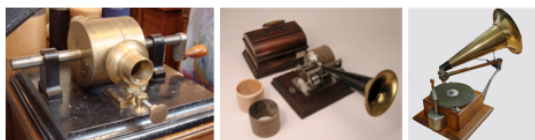
3. 研究の方法

明治期に都市部で発行の新聞(『朝日新聞』系、『毎日新聞』系、『時事新報』他、数社の地方紙も含む)、蝋管・蓄音機に関する記事や広告を国立国会図書館等で網羅的に調査した。なお、記事、広告は画像データ化、文字は書起してテキストデータ化した。それらをもとに研究報告書の発行と、webサイトによる公開を行った。

4. 研究成果

(1) はじめに

19世紀後半に始まる録音技術の歴史の中で、「蓄音機」はひととめに捉えられることが多い。本研究では、①錫箔蓄音機(Tin-foil Phonograph)[図1(左) Phonogallery 蔵2009.2]、②蝋管蓄音機(Wax-cylinder Phonograph)[図2(中)東京藝術大学蔵]、③平円盤蓄音機(Disc Phonograph)[図3(右)The British Library 蔵2008.2][撮影:筆者]に関連して明治11年(1878)から大正元年(1912)12月までの都市部を中心に発行された新聞約30社、約1800件の記事や広告を調査した。



(2) 新聞記事による蓄音機の用途の紹介
蝋管蓄音機が日本で披露された明治20年代は、大衆向けの試演会や娯楽のために使われた。平円盤蓄音機が普及する明治36年(1903)以降になると、慈善市の余興、慰問、博覧会の出品、調査、各種会合の余興など、用途は多様化する。

①試演会や娯楽に使用

(a)試演会:都市部では、明治10年代の「錫箔蓄音機」のお披露目時にも「試演会」を催して機械の使用方法や用途等を紹介していた。「蝋管蓄音機」の改良後も同様に、蓄音機に知識のある者達による「試演会」で使用方法や用途等が紹介された。明治10年代の試演会と異なる点は、都市部のみならず各地にも出向く等、「蝋管蓄音機」を広く一般に普及するための努力を惜しまなかったことであるといえよう。

(b)浅草公園:人々が「蓄音機」をようやく周知し始めた頃、当時、東京の中で最も繁華な場所、浅草公園の花屋敷がいち早く「蓄音機」を取入れ、観客を楽しませた。花屋敷の広告『読売新聞』[明治23年6月30日]に「フォノグラフ奥山閣縦覧の余興として御聞せ申す ひとりでものをいうきかい 蓄音器 一名 仮色 器械 浅草公園 花屋敷」という掲載が「蓄音機」の初広告となる。

(c)劇場:明治30年になると、「活動写真」が脚光を浴びる。その臨場感ある迫力に人々は魅了されるが、「蓄音機」は「活動写真」と同時に使用されることが多く、人気は継続する。また、芝居にも「蓄音機」が用いられる等、従来の音楽や音声を聴く装置という目的を多方面で活用するようになる。「蓄音機」が芝居に用いられた様子は、「蓄音器と俄」『大阪毎日新聞』[明治30年7月15日]に、「京都新京極のパノラマ館は、従前玉翁、尾半等の一座にて、二輪加を演じ居りしが、昨日より更に大蓄音器を狂言の中に応用してさまざまの事を発音させると云う。」とあり、当時としては、画期的な用途であったと思われる。

(d)船上:蓄音機を聴きながら船上で過ごしていることが、次の記事にみられる。「満州丸より(一)」『大阪朝日新聞』[明治37年6月16日]には、「瀬戸内航行中の汽船満州丸より一筆啓上。(中略)モーキング、ルームには蓄音器に聞とるるあり。(後略)」とあり、船内の喫煙室で蓄音機が楽しめた様子が記されている。

②慈善市(バザー)に使用

利益を慈善事業の資金に当てるために音楽会が開かれた。各会毎に蓄音機の用途は様々であるが、当時のプログラムによると蓄音機は、演奏家と肩を並べて演奏を行っている。孤児院新築の資金集めを目的に

開かれた四条南座での演芸大会について、「孤児院慈善演芸大会」『大阪朝日新聞京都附録』[明治36年5月22日]では、「平安徳義会の事業に係る孤児院は、創立以来十有余年に達し、可憐の孤児数千百名救養しつつあり。今や狭隘を告ぐるを以て本年度に於て新築せんと計画あり。(中略)蓄音機数番 島津商会 門開喜曲 樋口孝道 「ウワチリン」ホンガリーマーチ藤田駒三郎、《螢の歌》同、常磐津《乗合船》岸澤文字八、同文治、浄瑠璃《合邦辻 下の巻》豊竹呂昇、大薩摩《勸進帳》富士田千之助、三味線・杵屋君之助、杵屋美千之助、舞・中村玉七、浄瑠璃《菅原四段目》竹本文太夫、糸・鶴澤勝鳳、舞・實川延二郎、地方・岸澤文字八(後略)」と記されている。このプログラムから錚々たる出演者と共に「蓄音機」が出演していたことがわかる。なお、この会には「蠟管蓄音機」が使用されているが、演目の記載はない。

③慰問に使用

アメリカの病院で実践されていた「患者に蓄音機で音楽や演説を聴かせることが患者を労うことになる」という発想に倣い国内でも慰問に使用されていたようである。国内では、明治37年(1904)の日露戦争の開戦以降、「蓄音機による戦闘負傷病兵への慰問」の告知や報告が紙面に登場する。10年前の日清戦争時には「蓄音機を用いた慰問」に関する記事はなく、天賞堂の広告『時事新報』[明治37年1月22日]に、「(前略) 傷病騎士慰問用 {義光武勇錦御旗、七生魂、北白川宮殿下台湾行、外數十種。(後略)} と、慰問に相応しい平円盤の曲名を掲載し、「蓄音機」と「慰問」を結び付けたといえよう。

傷病兵を慰問するために、(a)慰問籍園遊会を開き蓄音機を用いる、(b)蓄音機を病院等の施設や団体に寄贈する、という方法が取られた。そして、明治38年(1905)に入ると、(c)軍人の遺族を対象とした慰藉会や招魂祭にて蓄音機を用いる、ことが始まり、明治末期以降も継続して各地で行われた。

・慰問籍園遊会を開いて傷病兵を慰問：紙面上で初めて慰問に蓄音機が使用されたのは、「傷病者慰問籍園遊会(佐世保)」『東京朝日新聞』[明治37年4月19日]であり、「本日午後二時より当海軍病院内に園遊会を催し、戦闘負傷病兵を集めて平素の憂鬱を慰めたり。(中略) 海事協会寄贈の蓄音器並に音楽隊の奏楽等種々の余興あり。(後略)」と、病院で治療中の兵士を対象とした蓄音機の演奏会が開かれた事が記されている。

・蓄音機を病院や施設、団体に寄贈して傷病兵を慰問：各地域の予備病院や海軍および陸軍病院等への蓄音機の寄贈が相次ぐ中、初めて記事として掲載されたのは、常

磐会(華族女学校卒業生)が東京予備病院へ蓄音機を贈ったことである。「蓄音器の慰問」『読売新聞』[明治37年6月8日]に記されている。

・軍人の遺族を対象とした慰藉会や招魂祭にて蓄音機を用いる：日露戦争終結後は、傷病兵の慰問に加え、軍人の遺族を対象とした慰問が行われるようになる。「軍人家族慰藉会」『大阪毎日新聞』[明治38年2月16日]では、「姫路報国会員の発起に係る出征軍人遺家族慰藉会は、昨日午後二時より同市城内陸軍偕行社楼上に開き。(中略)余興として三曲合奏、東高等小学校女学生の唱歌、鷺城音楽隊附属青年音楽会の奏楽、蓄音器、平円盤蓄音器等、その他数種の催しあり頗る盛会にて、午後五時頃閉会を告げたりと。」記されている。

④博覧会に出品

明治期に、ロンドンやパリで開催された万博の視察や出品を重ねたものの、「万博」の国内開催には至らなかった。しながら、それは「博覧会」という姿で実現し人々を魅了した。調査の結果、博覧会における蓄音機の使用については、(1)第五回国内勸業博覧会、(2)第四回全国製産品博覧会、(3)東京勸業博覧会、(4)第一回発明品博覧会、の記事に記載がみられ、博覧会会場の至る所に蓄音機が備え付けられ、音楽や解説等、各用途に添って使用され、人々を魅了していたことがわかった。

⑤探検記者が調査で使用

探検記者が蓄音機を持参して調査を行っていたことが、次の記事からわかった。

・樺太のアイヌ集落調査：「探検記者の消息」『読売新聞』[明治42年1月9日]には、「(前略) 昨八日午後樺太庁は、東京出張所に打電して曰く「読売記者松川木公子は今朝未明旅装を整へて官舎街の一号を發し、ガルキノ方面に向かってアイヌ部落に入れり氏が防寒具の上に一台の蓄音機を背負いたる風体いたく土民の奇好心を牽き到る所、熱誠なる歓迎を受けつつある模様なり」と聞くが(後略)」とある。

・コリヤーク調査：「小探検隊を組織し」『東京朝日新聞』[明治43年9月8日]には、「(前略) 五頭の西比利亞馬に蓄音機、活動写真機械、食料等を積みて内部の山地に向って出發した。(後略)」とある。

⑥各種会合に使用

畏まった会合においても蓄音機は欠かせない存在であり、人々の集う場に蓄音機は必須となっていたようである。会合は、(a)園遊会、(b)新年会、懇親会など、(c)落成式など、(d)記念式典、(e)クリスマス会、の5つに分類できた。

以上、新聞記事や広告の記載を例に蓄音機

の用途を考察した結果、試演会が行われた初お披露目の頃は、単なる機械・物でしかなかった「蓄音機」の用途は広がり、日常生活の様々な場に浸透してゆく様子が具体化した。人々が集まる場所では、演奏家と同等に演奏を披露し、皆を楽しませる存在であった。慰問では、ミュージックセラピーとして音楽を使用し、人々を癒した。展覧会では、出品物としてのみならず、人に代わって展示紹介や演奏等、実用的に使用された。また、記者の調査では再生機能以外にも、録音機能も活用された。

(※④と⑥は文字数の都合上、掲載紙面の引用を割愛)

(3) 新聞広告による蓄音機の用途の紹介
新聞に掲載された蓄音機店の広告にも、蓄音機の様々な用途が記される。また、蓄音機そのものや、人々が蓄音機から音楽を聴く様子のイラストも掲載された。これらは、蓄音機の具体的な使い方を広く一般にイメージさせ、日常生活の中に取り入れ易くさせる効果があったといえよう。

広告を大きく分類すると、次の3種類となる。①文言による紹介、②イラストや写真による紹介、③他の商品の広告に登場。

①文言による紹介

広告に蓄音機の「用途」が記される以前、蓄音機の使用方法や作動効果等、具体的な構造の紹介が多く掲載された。蓄音機への周知が深まりつつであった頃、ようやく蓄音機の「用途」に関する掲載が始まる。以下、「広告から抜粋した内容」、「店舗名」、「新聞名」[日付]を掲載年月日順に記す。

- ・「就中親の遺言を子孫にまで伝える事を得」 「浅海天尚堂」『大阪毎日新聞』[明治32年5月23日]
- ・「要件を吹込み之れを遠国に送れば、書信の代用を為す」 「三光堂」『時事新報』[明治35年7月22日]
- ・「外国語学の研究に必要なり(中略) 学生は幾回にてもこれを練習することを得」 「同上」『同上』[同上]
- ・「令嬢方音楽の独習に必要なり」 「同上」『同上』[同上]
- ・「心経質の方には尤も有効の器械なり蓄音器に依りて精良美妙の音楽を聞き、自然その心気を和らげ然る後医療その効果を奏すべし」 「同上」『同上』[同上]
- ・「学校に於ては理化学上説明のため、必要の器械なり。」 「同上」『同上』[同上]
- ・「蓄音器は軍旅の労を慰し志気を鼓舞するの効あり」 「三光堂」『大阪毎日新聞』[明治37年3月10日]
- ・「御家庭用、宴席用歌曲練習用等何れのものにても御好に应じ」 「三光堂」『大阪毎日新聞』[明治41年4月26日]
- ・「歳末歳始御贈答用として」 「三光堂」『大阪朝日新聞』[明治41年12月26日]
- ・「歌、三味線の独稽古自由[ひとりけいこができる]」 「中村商会 蓄音器部」『大阪毎

日新聞』[明治42年5月11日]

・「余興娯楽として、最良無比の蓄音器」 「古川時計店発音器部」『都新聞』[明治43年11月1日]

・「宴会余興用蓄音器貸」 「京屋 蓄音器部」『大阪朝日新聞』[明治44年5月23日]

これらの抜粋から、蓄音機の「用途」として「遺言、通信、語学学習、家庭団欒、音楽の稽古、精神安定、理化学的構造参考用、軍事慰安、贈答品、余興、娯楽、宴会」を想定していたことがわかり、エジソンが発明当時想定していた事柄よりも、用途は広がり、蓄音機が人々の生活に必需品となっていく様子がわかる。音楽を聴く目的以外に「参考用機械」として必要としているところは、技術的な面においても諸外国に追いつこうとする当時の日本の姿勢が伺える。

②イラストによる紹介

・蓄音機の絵：蓄音機そのもののイラストを示し、その姿を印象付けた。初掲載は、「石原楽器店」の広告『大阪朝日新聞』[明治30年8月12日][図4]である。以降実物さながらのイラストの掲載が流行る。

・収録状況を描いたもの：蓄音機に洋装の外国人女性教師が英語を吹き込んでいる様子[図5]を描いている。

・蓄音機から聴こえる音楽をイメージしたもの：蓄音機のフォンから演奏家を登場させるイラスト[図6]を用いている。聴こえてくる音楽の演奏者を具体的に描いて印象付けた。ここでは、フォンから娘義太夫、軍楽隊が登場する姿を描いている。

・稽古の様子を描いたもの：蓄音機を前に語学の学習[図7]、音楽の稽古[図8]をしている様子を描いている。

・店舗の絵：店内に詰めかけた人々が蓄音機に聞き入る様子[図9]が描かれており、蓄音機店への来店を誘う。

・戦場の蓄音機を描いたもの：日露戦争時、戦地の様子[図10]や軍楽隊[図11]を描いたイラストも掲載され蓄音機の必需性は増した。

・家族団欒の様子を描いたもの：家族で蓄音機を聴く姿[図12]や子どもだけで蓄音機を聴く姿[図13]を描いている。「蓄音機」があれば子どもだけのお留守番も容易であることに加え、誰にでも手軽に操作が可能であることも示している。

・人気演奏家の顔写真を使用：イラストの他に、顔写真も掲載された。初めて広告に顔写真が使用されたのは、娘義太夫の豊竹呂昇であった『東京朝日新聞』[明治44年3月11日]。続いて、浪曲師の吉田奈良丸『国民新聞』[明治44年4月7日]ほか、京山小圓『東京朝日新聞』[明治45年4月29日]ほか、桃中軒雲右衛門入道『国民新聞』[明治45年5月18日] 他らの顔写真も広告に多用され、当時の人気伝わる。

これらの広告に掲載された各種のイラストには、商店毎に斬新かつアイデアに富んだ蓄音機の意匠、活用の具体例の詳細な提示が見られる。また、臨場感を演出する効果も兼ね、その結果、蓄音機の普及に結びつuitと考える。そして、明治の終わりから掲載された演奏家の顔写真は、さらに視覚的な印象を強めたといえよう。

③他の商品の広告にて紹介

蓄音機以外の商品「仁丹」『大阪毎日新聞』[明治41年4月8日]、「美音剤・カオル」『国民新聞』[明治45年2月2日]、「腸胃薬・ヘルプ」『日出新聞』[明治45年7月26日]の広告に、蓄音機が商品を宣伝している様子を描いたイラストが用いられる。新聞広告上においても、蓄音機の集客効果を利用していることがわかる。



(4) 収録内容

蓄音機店で販売していた「市販」のもの、個人の録音による「オリジナル」のものがある。各内容を考察することは、当時の用途や人気曲の探求にも繋がると考える。

①市販の蠟管

明治期の市販の蠟管には、(1)邦楽曲：長唄、清元、常磐津、義太夫、端唄、唄物、(2)楽隊、(3)声色、(4)詩吟、(5)唱歌、(6)講談、(7)演説、(8)語学教材：英語、ドイツ語、フランス語、以上8つのジャンルがあった。なお、これらの「曲名」や「演奏者名」の詳細については今後の調査を要する。

②市販の平円盤

明治期の市販の平円盤には、(1)義太夫、(2)端唄、(3)謡曲、(4)長唄、(5)軍楽、(6)落語、(7)浪花節(浪曲)、(8)薩摩琵琶、(9)筑前琵琶、(10)唱歌、(11)詩吟、(12)清元、(13)箏曲三曲、(14)雅楽、(15)講談、(16)歌澤、(17)常磐津、(18)三河萬歳、(19)大相撲(甚句)、(20)新内、(21)草笛、(22)地歌、(23)河東、(24)平家琵琶、(25)木遣節、(26)物真似、(27)芝居台詞、(28)声色、(29)影芝居、(30)演説。以上30つのジャンルがあった。これらは、明治36年(1903)10月の平円盤発売当時に新聞広告に掲載された「天賞堂の広告」『東京日日新聞』[明治36年12月10日]、『都新聞』[明治36年12月15日]他から、特に多

くの演者名と曲名が掲載された8件の「天賞堂」広告をもとに発売曲数の多い順に列記したものである。広告に掲載されなかった天賞堂の商品、他店舗で発売されたレコードと併せると、まだまだ多くの曲目、演奏者、ジャンルがあることが予想される。

蠟管が主要メディアとして販売されていた頃には、蓄音機店の広告に曲名の掲載はなく、この広告は斬新なアイデアであった。そしてこの掲載は、人々に平円盤の内容を周知させ、蓄音機をより身近な物へと近づけ、購入しやすい環境を作りあげたといえよう。発売以降、平円盤はたちまち人々の心を掴んだ。今まで主要媒体であった「蠟管」との差異は、音質の良さと、軽便さだという。新聞広告では、平円盤の蓄音機のイラストが紙面を飾るようになり、また、新しい平円盤の発売毎に演者名と曲名が掲載される等、当時の話題を独占する勢いも当時の広告から読み取れる。

③蠟管のオリジナル録音

オリジナルに収録された蠟管には、浅草の見世物用(歌舞伎役者の台詞)、蓄音機試演会用、博覧会の用、活動写真用、個人使用(市川團十郎九代目)、牧師の説教、堀田正養子爵、徳川慶喜公、出征軍人、田中正平博士等について掲載があった。

一度、収録した蠟管は、録音の際に蠟管の表面にできた「音溝」を削り取れば再利用が可能である。そのため、蓄音機の購入者が、自分の好きなものを手軽に録音できることも装置の魅力であった。この手軽さに魅了され、様々な場所で用いられている。なお、平円盤に関しては、オリジナル吹込みの事例が紙面上に登場しなかった。

(5) 平円盤の収録状況

平円盤の発売は、明治36年(1903)11月8日より銀座の「天賞堂」で始まる。それらは、同年10月27日にアメリカから到着した第一回輸入分であった。これに関する記述は、「天賞堂」の広告『都新聞』[明治36年12月15日]に、「(前略)明治三十六年十月二十七日第一回新輸入 同年十一月八日発売開始(後略)」と記されていることからわかる。この時のレコードは、アメリカから日本に招聘した録音技師らによって収録され、それをアメリカに持ち帰り商品化・レコードとして日本に輸入している。なお、収録曲は、軍楽、謡曲、琴、筑前琵琶、長唄、義太夫などであったという。

邦楽曲を収録したことや、完成したレコードの披露会が行われたことを「大声蓄音機の披露会」『時事新報』[明治36年11月7日]には、「(前略)先般米国より技師兩名を招聘して、我国の軍楽を始めその他諸名家の謡曲、琴、筑前琵琶、長唄、義太夫、草笛外数十種を吹込み、これを米国の会社に送りて製造せしめたるに、今回第一回分到着したるに付き、一昨五日、上野精養軒

に於て披露会を催したるに結果頗る良好にて、殊に当日は右音曲に関係ある諸芸人等をも招待したれば席上に本人を見ながらその音曲を聞き得て一層の興ありしと。」と記されている。

(6) おわりに

明治22年に日本に初めて姿を見せた「蠟管蓄音機」は、明治36年の「平円盤蓄音機」の登場に圧迫されながらも、息長く明治期の人々に愛された音楽装置であったといえよう。「蠟管」という文字が、最後に紙面上に掲載されたのは、「萬歳商会」の広告『萬朝報』[明治45年2月1日]である。実際のところ「蠟管」の在庫処分、投げ売りでの可能性も考えられる。しかしながら、20年以上にも渡り、第一線で活躍し続けた機械であることには変わらない。「蠟管」の強みは、音溝を削れば、同媒体を用いて再び録音ができるという手軽さにもあると考える。また、「丸菱商会」の広告『大阪毎日新聞』[明治32年5月23日]には、「破損蠟管の為直し 音譜蠟管の削り直し 音譜吹込替の御希に応じ可」とあり、「三光堂」の広告『東京朝日新聞』[明治42年9月24日]には、「蠟管破損または蠟管は 便宜御引換申上ぐべく御不用に候えば相当価格にて御引取受申上ぐべく候」とあり、蠟製の脆弱な蠟管の修復、再録音のための削り直しに加え、カビの生えた蠟管の引取りにまで対応するアフターサービスの充実が記されている。人や物に対する細やかな対応がなされていたことも、紙面上から読み取る事が出来る。

本研究では、明治期の新聞調査を通して、「再生と録音」という蓄音機の機能的な部分が最大限に活用されていたことが明らかとなった。

「再生機」としての「蓄音機」の利用は、娯楽施設や劇場において「見世物」や「呼び物」として重宝されたことに始まる。軍事的催し、学校行事等、人々の集まる場での使用は必需となる。そして、大衆向きのみならず、後に個人の語学学習、音楽の稽古、家庭の団欒、外国へ向かう船上等、小規模での使用にも広がる。時には人に変わり、音楽の演奏、展示品の解説、店先の呼び込み等、活躍の場は尽きる事がなかった。さらに、負傷者や病人、精神安定のためのミュージックセラピーも行った。

一方、「録音機」としての「蓄音機」の利用は、通信、調査研究、遺言文の記録、邦楽譜作り等、その貢献は幅広く、自分の声を録音することを目的に「蓄音機」を購入した著名人も居た。

また、蓄音機店が掲載した「平円盤」の新聞広告から、明治期に販売されていた曲名と演奏者名を分析した結果、三味線による邦楽曲の需要が圧倒的に多かったこと、西洋楽器を用いた軍楽隊で邦楽曲が演奏

されていたこと、音楽以外では、歌舞伎役者の台詞に人気があったこと等がわかった。これは、本研究で未着手となった「市販の蠟管の曲名調査」のための事前調査にもなったといえる。また、「各ジャンルの人気の理由」「演奏者に関する詳細」「蓄音機の価格と機種名の特定」などに関しても継続して追跡調査を行いたい。

本調査の遂行により、国内における主要な新聞はほぼ網羅したことになる。次の機会には、明治期に国内で発行された地方紙を中心に調査を行い、各地域における「蠟管蓄音機」の受容と普及について研究し、さらに発展させたい。そして、新聞という各国共通のメディアの調査・研究を一つの方法論として提案したいと考える。

*「蠟管」と「平円盤」、「各蓄音機の価格」、「蓄音機販売店」については本紙面上文字数の都合により割愛した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)
〔雑誌論文〕(計3件)

① 松村智郁子「明治期のカラオケ・紙腔琴(2)-曲譜の仕組みと音の関係-」『東京藝術大学大学美術館年報(平成24年度)』2014, pp. 42-44 (査読無)

② 松村智郁子「明治期のカラオケ・紙腔琴(1)-当時の新聞記事・広告からその人気を探る-」『東京藝術大学大学美術館年報(平成23年度)』2013, pp. 35-39 (査読無)

③ 松村智郁子「奥浄瑠璃の蠟管(ろうかん)録音の背景について-残された資料から読み解く-」『東京藝術大学大学美術館年報(平成22年度)』東京藝術大学大学美術館, 2012, pp. 29-31. (査読無)

〔学会発表〕(計1件)

① 松村智郁子「明治期における蠟管蓄音機の受容と普及の研究」(東洋音楽学会, 場所未定, 2014年12月13日予定)

〔図書〕(計1件)

① 松村智郁子「明治期における蠟管蓄音機の受容と普及の研究 -音楽、声の記録と社会的背景を中心に-」(発行者: 松村智郁子 東京藝術大学音楽学部, 2014年, 総ページ数 620)

〔その他〕ホームページ等

<http://koizumi7.ms.geidai.ac.jp/rokan/index.php>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松村 智郁子 (MATSUMURA, Chikako)
東京藝術大学・音楽学部・講師
研究者番号: 60436699